

2023年2月19日（日）主日朝礼拝説教

『生き返った息子』井上隆晶牧師
詩編23篇1～6節、ルカ福音書15章11～24節

①【神の恵みを無駄遣いする人間】

今日は放蕩息子の譬えからお話をしましょう。この譬えで父親は神様を、二人の息子は私たち人間を象徴していますが、ここでは兄はユダヤ人を弟は異邦人を象徴しています。ただし、兄も弟も私たちはどちらにもなり得ることを知っておかなければなりません。弟は父親に「**私にいただくことになっている財産の分け前をください**」（12節）という、父は兄にも弟にも財産（家畜や土地など）を分けてあげます。弟はそれをお金に変え、遠い国に旅立ちます。私たちは自分の欲しい物が手に入れば幸せになれると思います。そしてお金がそれを実現させてくれると錯覚しています。でも実際には何を手に入れても満たされないのです。彼は放蕩の限りを尽くし、財産を無駄遣いし、ついにすべて無くしてしまいます。更にひどい飢饉が起こり、食べるのにも困り始めたので、彼は豚の世話をするようになります。豚はイスラエルでは汚れた動物ですから、彼は生きる為に心と身体を汚したことを意味しています。悪魔は囁きます。「**現実は厳しいのだ、生きる為には悪と妥協しなさい、皆していることだ**」こうして彼は豚以下になります。

②【自己回復能力を強めるのが愛である】

落ちるところまで落ちた時、「**彼は我に返り**」（ルカ15:17）ます。英語では「**w hen he come to his senses**」です。「正気に返る、迷いがさめる」という意味です。口語訳では「**本心に立ち返って**」と訳しています。すべての幸せは過ぎ去り、二度と戻ってきません。幸せを失って初めて私たちは与えられていた幸せに気がつき、それをなぜもっと喜び、大切にできなかったのかと後悔します。いくら豊かに与えられても、人間はそれを喜ばず、恵みをしっかり受け取る力がないのです。それが罪の恐ろしさです。幸せに気がつくためには、**喪失体験が必要です**。

●心の病の勉強会で西川京子先生は「人は失敗をする権利を持っています。失敗をマイナスととらえないで、失敗も回復の一つのステップだと考えましょう。」と言われました。親は子供になるべく人生を失敗せずに幸せになってもらいたいのので、子供をコントロールしようと口出しをしたり、失敗する前に助けようとします。しかし人間力を身につけなければ成長しません。その為にも失敗をさせなければなりません。失敗しなければ分からないことがあるのです。父なる神様はそれを知っておられました。財産が無駄になると分かっているが、あえてそれを与えたのです。

弟はこう言いました。「**父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ**。」（17節）。彼は故郷の温か

く満たされた日々を思い出します。これを教父たちは「聖なる憧れ」と呼びました。人間の心と身体には「回復しよう、善くなろう」とする神様が下さった「自己回復能力」(レジリアンス)が備わっています。それは私たちの中に埋め込まれた神の像、神性の断片です。これは罪をもってしても破壊できないものです。愛された人はそれが強く、愛されなかった人はそれが弱いのですが、愛はそれを開花させ、強くするエネルギーです。

●今から50年ほど前、島秋人(しまあきと)という一人の死刑囚が自分の犯した罪を深く悔いた後、刑の執行をうけました。島秋人は幼い頃から、不遇な境遇に置かれ、馬鹿にされこそすれ、褒められたことのない少年でした。ところがある日、中学で図工の教師から「お前の絵は決して上手くないが、構図がいい」と褒められたのです。獄中でこのことを思い出した彼は、その教師に手紙を書きました。その後短歌を作るようになり、それがやがて「歌人・島秋人」を生むことになりました。死刑確定の日に彼は、その教師の古いシャツを着て、その辛い宣告を受け止めたそうです。「先生のたった一言の褒め言葉が、私の心を救い、私の人生を変えた。私のような愚かな者でも少しは人が認めてくれる歌を詠むことができた。ありがたいことです。」とっています。

③【神の憐れみを知ること】

息子は父にこう告白しようと決心します。「私は天に対してもお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください。」(18~19節)ここで彼は自分の正しさも、息子としての権利も放棄していることをお気づきでしょうか。最初はそうではありませんでした。「私がいただくことになっている財産を下さい」(12節)と自らの権利を主張しています。彼は立って出かけます。すると「遠く離れていたのに、父親は息子を見つけ、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻し」(20~21節)ます。息子は罪の告白をしようとしませんが、父はほとんど聞いていません。すぐに息子に最上の服を着せ、指輪を渡し、履物を履かせます。それは「朽ちない体」、「神の子の資格」、「自由」を象徴しています。これらは私たちが正しいから与えられるものではなく、神の憐れみによって与えられるものです。これらのすべての行動を起こさせるものが神の「憐れみ」です。英語では「Father... was filled with compassion for him」です。「息子に対する憐れみ・同情でいっぱいになり」です。憐れみが神を支配しているのが分かります。父は言います。「肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。」(23~24節)命である神から離れることが死であり、神に帰ることが命です。息子は父の元に帰ったので生き返りました。父は喜び、祝宴を開きます。そのひな形が聖餐です。息子はすべてを失って初めて、決して失われない神の愛を、いつでも帰れる家があることを知りました。

一方、父の家で品行方正な生活をしていた兄は、父親に腹が立って仕方がありま

せん。「自分は言いつけに背いたことは一度もないのに、宴会などしてもらったことはない。不公平だ！私は正しい！」と言わんばかりです。更に弟の事を「**あなたのあの息子**」(30節)と呼んで、自分の弟ではないと言っています。兄弟との関係が切れているのが分かります。それゆえ彼の心は父親からも、天国から遠くにあり、彼も失われた者なのです。作家の伊集院静さんが「子どもの教育で大切にしているのは、他人の痛みが分かること。自分以外の人の痛みが分かるようになれば、教育の8割は終わり、それが一番大事なこと。」とっていますが、それは宗教も同じなのです。宗教の本質とは正しさではなく、憐れみです。人を憐れむ人は神に似た人なのです。

●ドストエフスキーは「罪と罰」という小説を書きました。マルメラードフは貧しく、妻に先立たれソーニャという娘と生活していましたが、幼い子供を抱えた女性と再婚します。ところがその後妻が結核になり働けないのでソーニャが身を売って家族を養います。マルメラードフは毎日酒浸りになり、酒場でこう言います。「わしはこの小瓶に悲しみを求めた。それを見出し、味わったんだ。ただ万民を憐れみ、すべてを知られる神様だけが、我々を憐れんで下さる。…最後の日にやってきてこう言われるだろう。『意地の悪い母のために、他人の子どものために自分の身を売った娘はどこだ。酔っ払いで、やくざ者の父親をも気の毒に思った娘はどこだ。さあ、来なさい。お前の多くの罪も赦される。お前が多く愛したゆえに。』こうして娘のソーニャは赦されるのだ。…赦されるとも、わしはもう分かっている。きっと赦されるに違いない。さっきあの娘のとこへ行ったとき、この胸ではつきりと感じたんだ！…神様は万人を裁いて、万人を赦される。善人も悪人も、賢い者も、謙虚な者も、…そしてわしも召して下さる。お前たちも来なさい。…すると善人たちが『神様、なぜ彼らをお迎えになるのですか』という。するとこう言われる。『私は彼らを迎える。彼らの中の誰一人として自分が天国にふさわしいと思う者がいないからだよ』と。こういつて我々に手を伸ばして下さる。…主よ、あなたの御国が来ますように。」

私は今回このテキストを学び「**憐れみ**」という言葉が一番心に残りました。他教会の信徒さんが「福音派では『祝福して下さい』と祈るけれど、この教会では『主よ憐れんでください』と祈るのに驚いた」と言われました。「主よ、憐れみ下さい」は教会で祈られてきた最も古い祈りなのです。この神の憐れみゆえに人は生かされ、赦され、救われ、神の国に入れられるのです。ここまで来て、初めてこの物語が天国での話ではないかと思いました。天国とは「**憐れみの国**」なのです。天国では誰も自分の正しさも権利も主張しません。憐れみの神に対して私たちも同じように正義も権利も捨てなければならぬのです。それを回心と呼び、それをした時、私たちは神の国に入ります。そして全ての人の中に自分を見、全ての人を家族と思い「私たちを憐れんでください」と祈らなければならぬのです。兄は天国にいながら、隣人

との絆を切り、正義と権利を捨てられなかった人なのです。だから心は天国から遠いのです。明日から受難週です。自分の中に住んでいる兄の心、正しさと権利を捨てるために祈りましょう。